

中学校

★ 鑄造たいけん！～ピーナツ型はし置きを作ろう～

教材：鑄造

ねらい：鑄造の方法を理解することによって、彫刻作品に興味をもって味わうことができる。

〈学習指導要領：A表現（2）（3） B鑑賞 に対応〉

教材について

宇部市では、市内の様々な場所に彫刻が設置してあり、彫刻は生活に密着し身近に感じられる。近々「学びの森くすのき」に彫刻が2点設置される予定である。しかし、彫刻は抽象的な形が多いため、中学生には理解しにくく、興味をもてないのが現状である。「学びの森くすのき」に設置される彫刻の一つが、ブロンズの鑄造作品であることから、実際に鑄造体験をし、制作過程を理解させることによって、鑄造作品に興味をもてるようにさせたい。「学びの森くすのき」を訪れる時、作品を身近に感じられれば、宇部市内の他の彫刻にも目を向けることもでき、ふるさとを愛する心が育つと考える。



展開例

学 習 の 流 れ

- ① 自由樹脂でピーナツの型を取り、鑄型を作る。
- ② 宇部市の彫刻について歴史概要を知る。
- ③ 鑄型にスズを流し込む。
- ④ 鑄型から作品を取り出す。
- ⑤ 鑄造による作品について学芸員の説明を聞く。
- ⑥ 「学びの森くすのき」についての説明を聞く。

授業づくりのポイント

- ◇ 制作の流れがひと目でわかるように、写真を黒板に掲示しておく。
- ◇ 鑄型やスズを冷ます時間を利用し、宇部市の彫刻の歴史や開館予定の施設、設置される彫刻作品について説明を聞く。
- ◇ スズの流し込みは、危険を伴うので教師が行い、その様子をプロジェクターで見せる。
- ◇ 鑄型から作品を取り出す時、完成の喜びや達成感を実感させる。

教材研究と協力者など

- ・ 鑄造は、型作りに時間を要するのが難点で、授業に取り入れることは容易ではない。自由樹脂を用いることで、短時間で鑄造の型を作り、鑄造の疑似体験をさせる。
- ・ 第24回UBEピエンナーレ（現代日本彫刻展）
北沢努「森に棲む」2010-5
- ・ 鑄造作品の紹介を学芸員の協力により専門的に指導。
- ・ 宇部ときわミュージアム 緑と花と彫刻の博物館
- ・ 宇部市学びの森くすのき



他の取組例

- 自分の周囲にある鑄物を探しスケッチすることで、より深く対象を見る姿勢を育てる。
- 鑄造して作られた彫刻作品を鑑賞する。作品の表面の細かい表現等をよく観察する。
- 次年度、模型による彫刻作品の鑑賞学習につなげていく。

★ 西の京をつくりあげた大内氏

教材：大内氏

ねらい：大内氏が行った事蹟を調べる活動を通して、室町幕府が戦乱によって次第に弱体化する一方、地方では守護大名が勢力を伸ばし、都の文化が地方に広がっていったことを理解する。



〈学習指導要領：社会科歴史的分野 内容（3）アに対応〉

教材について

大内氏は、西国随一の権勢を誇った守護大名である。百濟聖明王の子孫と称し、周防国多々良浜に着岸したことから多々良氏と名乗り、後に大内村に居住したことから大内を名字としたとされる。

第9代当主弘世は本拠を山口に移し、京都になった町づくりを行った。その子義弘は6か国の守護を兼ねたが、将軍足利義満に危険視され応永の乱で敗死、一時大内氏は衰えるもののその後再興した。第14代当主政弘は応仁の乱に西軍側の主力として参戦し、また、明や朝鮮との貿易を行い大きな利益を上げた。文化にも造詣が深く、京都から雪舟をはじめとする多くの文化人が山口を訪れた。

第16代当主義隆は軍事よりも文化的事業に力を入れ、山口は当時日本で最も栄えた都市のひとつであった。ザビエルもこの時訪れ、布教の許可を得ている。やがて、陶晴賢の反乱を招き、義隆は長門深川の大寧寺で自害した。義隆の死により、事実上、大内氏は滅亡した。

展開例

学習の流れ

- ①全盛時代の大内氏（義隆の頃）が治めたのはどれくらいの範囲だろう。
 - ・周防、長門（山口）
 - ・安芸、備後（広島）、石見（島根）、筑前（福岡）、豊前（大分）
- ②これだけ大きな力をもつことができたのはなぜだろう。
 - ・明德の乱（のちに応永の乱を招く）
 - ・応仁の乱（西軍で活躍）
- ③山口が西の京といわれるのはなぜだろう。
 - ・将軍足利義植が9年間、山口に滞在した
 - ・京都から多くの文化人が訪れた
 - ・京都になった町づくりがおこなわれた
- ④大内氏が山口県に残したものは何だろう。

授業づくりのポイント

- ◇資料から大内氏は、周防・長門の守護職にとどまらず、多くの国の守護職を兼任し、大きな勢力をもっていたことに気付く。（義弘は、和泉・紀伊守護職も兼任した。）
- ◇戦での活躍から勢力をのぼし、幕府と密接な関係を築いたことや、明との勘合貿易で莫大な利益を上げていたことを理解する。
- ◇写真をもとに、県内にある国宝は大内氏に由来するものが多いことを確認するとともに、小学校で学習したザビエルも山口で活動していたことを想起する。
- ◇「街道をゆく」の一節を読み、大内氏が山口県に残した影響を考える。

教材研究

- ・山本一成著『栄光と挫折の賦－守護大名大内氏－』（大内文化探訪会、2006年）
- ・司馬遼太郎著『街道をゆく 湖西のみち、甲州街道、長州路 ほか』（朝日新聞出版、2008年）
- ・大河ドラマ『毛利元就』（NHK、1997年）
- ・瑠璃光寺五重塔、雪舟筆「四季山水図」・日本国王之印（毛利博物館所蔵）

★ 吉政遺跡を調べよう

教材：吉政遺跡

ねらい：柳井市内にある吉政遺跡から、弥生時代の柳井の状況を知ることを通して、弥生時代の人々の生活の様子を理解することができる。

〈学習指導要領：社会科歴史的分野 内容（2）ア 古代までの日本に対応〉

教材について

吉政遺跡は、財団法人山口県教育財団が実施した柳井ウェルネスパーク都市公園整備事業に係る遺跡の発掘調査で明らかになった、今から 1800 年前の弥生時代後期後半から終末期にかけての集落である。直径 10m をこえる円形住居や斜面特有の住居の構築方法、出土した弥生土器など注目すべき点がある。これらの考古学の成果を活用した授業を通して、当時の人々の生活の様子や弥生時代の特徴をとらえるのに適した教材である。

展開例

学習の流れ

- ①視聴覚教材と地形図を手掛かりに、吉政遺跡のあった場所の現在の土地利用を割り出す。
- ②遺構や出土品から、弥生時代の人々の生活の様子について考える。
- ③なぜこのような場所に集落ができたのかを、立地条件から話し合う。
- ④古墳の分布図から、弥生時代ののち、柳井はどのような地位を築くのかを推測する。

授業づくりのポイント

- ◇遺跡の位置と周辺の遺跡を示した地形図と現在の地形を重ね合わせて考える。
- ◇視聴覚教材や資料集から、弥生土器の特徴や円形住居で生活する人々の様子を考える。
- ◇古柳井水道が存在し、南側に海峡、北側に山地を有し漁労や狩猟が可能なことを理解する。
- ◇古柳井水道に沿って古墳が建ち並んでいることから水運で栄えた権力者の存在に気付く。

教材研究

- ・吉政遺跡 所在地：柳井市大字新庄字林
柳井低地を見渡せる大平山側の台地群の一角に位置
- ・参考文献 山口県教育財団埋蔵文化財調査報告第 1 集（1996）
～柳井ウェルネスパーク都市公園整備事業に伴う発掘調査報告～
- ・VHS「吉政遺跡」 制作：TYS テレビ山口
企画：財団法人山口県教育財団 協力：山口県埋蔵文化財センター



出土した弥生土器

他の取組例

- 社会科 古柳井水道に沿って建てられた古墳の数や規模から、古墳時代に大きな権力をもった王が熊毛地方に存在していたことを明らかにし、熊毛地方とヤマト王権との関わりを調査する。



東から見た古柳井水道

★ 100年後に残る、これからのむかし話づくり ～山口県のむかし話～

教材：「阿武町のむかし話」（「高尾の三度栗」「郷川の水がなくなった古老の話」）
 ねらい：阿武町に伝わるむかし話を通して、伝統的な言語文化に興味や関心をもち、むかし話に含まれている教訓から人間の本質について考える。その考えをもとに、次世代に伝える新しい「むかし話」を創作し、発表・討論を通して、あらためて人間という存在に対する弱さ・尊さに気づき、愛するようになる。

〈学習指導要領：第2学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア・イに対応〉

教材について

本単元においては「阿武町のむかし話」を取り上げる。むかし話は地域に根付いた伝承に「教訓」を加え、読者に伝えることができる読みものである。

授業では「高尾の三度栗」と「郷川に水がなくなった古老の話」の二つの伝承を取り上げる。前者は、弘法大師に水を恵んだところ1年に3度実る栗の実を貰う「人によいことをするとよい報いがある」という教訓であり、後者は、老人に水を恵まなかったために郷川の水がなくなった「悪いことをすると悪い報いがある」という教訓である。

単元の前半ではこの2つの伝承がなぜ現代まで残っているかを考える。その存在意義が伝承に含まれているメッセージである「教訓」が現代にも伝わることに気付くことができるようにする。「報復」を恐れ、同時に「報い」という見返りが欲しいという人間の弱さの本質は1000年前も現在も変わりなく、だからこそこの伝承が現代まで伝えられていることを生徒の言葉で説明できるようにしたい。

単元の後半では新たに「教訓」を組み入れた「100年後に残るむかし話」を創作する。この活動は「今」を題材とする。しかも「教訓」を考えるための素材として自分自身を位置づける。自分の弱さ、みにくさを対象とすることで、生徒は自分自身を直視し内省することとなる。しかし弱い存在である自分そのもの、その弱さを克服しようと努力し続けていることの「尊さ」を自分なりに肯定的にとらえ、さらに追究できるようになるまで深めていきたい。

展開例

学習の流れ

- ①「高尾の三度栗」「郷川の水がなくなった古老の話」読み、それぞれの教訓を比較する。
- ②2つのむかし話が現在まで残っている理由を考え、「教訓」の必要性に気付く。
- ③むかし話の構成を分析し、教訓と地域性が盛り込まれていることに気付く。
- ④100年後の人たちに読ませるむかし話を創作するため自分自身と向かい合う。
- ⑤未来永劫変わることはない人間の弱さとその愛らしさ、いとおしさについて考える。

授業づくりのポイント

- ◇単元全体を「100年後の人たちに向けてのむかし話づくりを通して教訓から人間の尊さに気づく」問題解決型の学習として構想する。
- ◇自分たちの創作の「教訓」と地元の伝承の「教訓」の意味が同じことを、生徒の言葉で説明させ、学習意欲を高める。
- ◇友達や地域の大人たちとの交流・取材を通して、むかし話を創作する材料とする場面を設定する。
- ◇生徒の作品に対する意見を肯定的に評価し、学習に必要な視点や方法を身に付けさせる。
- ◇教訓の意味と必要性について討論することにより、人間の変わらない弱さ、そして尊さを生徒自身が説明し、振り返る。

教材

「高尾の三度栗」(宇生賀の七不思議から)

むかしむかし、弘法大師が諸国を回られ、お説教をして歩かれておる途中、宇生賀に立ち寄られた時のことです。

大師が、一軒の農家に立ち寄られ、「水を一ぱいくださらんか。」と、そこのおかみさんに頼まれました。

その時、おかみさんは、一所懸命機織りをしておりましたが、手を休め、にこにこした笑顔で、「どうぞ、どうぞ。まずはおかけ下さい。今用意してまいりますから。」と行って、早速準備をし、お茶とゆで栗で、心をこめて接待いたしました。

大師は、大層よろこばれ、お礼のしるしにと、たもとから一個の栗を取り出され、「たった一つの栗だが、この栗を植えてみなされ。一年に三度栗が実る程に。」と、申されました。

大師が立ち去られたあと、おかみさんは、早速、庭さきに栗を植えておきました。

月日がたち、おかみさんは、栗の木のことをすっかり忘れておりましたが、ある年、栗が実をつけました。

ところが、大師が言われたとおり、その年に三度も実りましたので、おかみさんは、びっくりしました。

この三度栗のお話は、いまなお、宇生賀の七不思議の一つとして、語り伝えられています。

「郷川に水がなくなった古老の話」(抜粋)

一人の貧しい姿をした旅の老人が郷の里にやって来ました。彼は旅の疲れと陽気のせいであげが渇き、ある一軒の農家を訪れ「旅をして喉が渇いています。水を一杯飲ませてください。」と頼みました。

すると家から出て来た女の人は旅人を見るなり「あんたのような人に一杯も飲ませる水はありませんよ。」とすげなく断りました。旅の老人は淋しげに静かに立ち去りました。

さてその夜の事です。例の女の寝ている枕元に白衣を着た老人が夢に現われ「わしは昼間水を乞うた旅人だが、あんたの欲の深いのには驚いた。やがて田植えも始まるだろうが、郷川には水が流れないようにするからな。」と云ったかと思うと老人の姿は消え、女の人はハッと目覚めました。

女の人は大変恐ろしくなり昼間自分が旅人に邪けんな言葉をつかった事を後悔し深く反省したそうです。

それから後は旅人の言葉通り郷川はいつも河水が表面を流れず地下を流れるようになったと
—出典「阿武町のむかし話」阿武町教育委員会編—

教材研究

「高尾の三度栗」の舞台……阿武町宇生賀

阿武町の山間にある盆地で、もともとは堰止湖からできた湿地帯である。

古くから乾田化に向けた努力が続けられ、今では法人化・大規模化を柱とする県下有数の農業先進地となった。

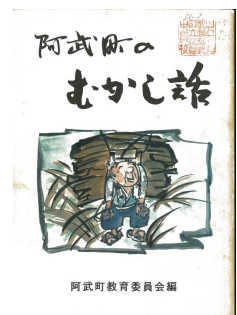
宇生賀盆地は、かつては杉の巨木が生い茂っていたと考えられ、奈良の大仏殿再建の際、材木を切り出したという言い伝えも残されている。

「郷川に水がなくなった古老の話」……阿武町奈古

阿武町の日本海側に位置する町の中心地である。

漁業が盛んであり、道の駅の発祥地の一つである「道の駅阿武町」がある。

郷川は普段は水が無く、大雨の時でないとき水が流れない。



★ 僧 月性の志に学ぶ

教材：幕末勤王僧 「月性」

ねらい：明治維新の原動力となった僧 月性の志をもとに、人としての生き方を学び、自分自身の志をもつ

〈学習指導要領：各学校の定めた目標による〉

教材について

僧 月性は幕末に大島に生まれ、後の明治維新の思想的な原動力となった人物である。月性は、若くして向学心に燃え、郷土を離れ全国各地で修学し、今後の国のあり方について学んだ。

特に、27歳の京阪遊学の際に詠んだ有名な「立志の詩」は月性の志を端的に表し、生徒にとって多くの示唆を与えてくれるものである。また、大島地区には、月性を顕彰する会が活動しており、本学習では、顕彰会とも協働し、月性の生き方を学ぶとともに、月性にちなんだ剣舞の伝承を行うものである。



展開例

学習の流れ

- ①僧 月性の志について学ぶ
顕彰会指導者より幕末の社会状況や月性の生き方についての講話を聞く。
- ②剣舞の練習（8月5回 1月3回）
9月の体育祭、1月の立志の集いの発表に向け、剣舞保存会より指導を受ける。
- ③立志の集い
自分のこれから生きていくための志の発表と剣舞の披露をする。

授業づくりのポイント

- ◇立志の詩をもとに、当時の社会状況と月性が修学のため強い決意をもっていたことを理解させる。
- ◇地域に伝わる伝統を引き継ぐため、特に礼節を重視して反復練習をさせることにより、やり遂げた達成感を味わわせる。
- ◇キャリア教育の一環として、月性と自分の生き方を照らし合わせながら、生徒一人ひとりが志をもてるようにする。

教材研究

- ・月性展示館：柳井市遠崎（妙円寺境内）
僧 月性全般についての資料、特に時代背景や人物関係を把握することができる。
- ・清狂草堂：妙円寺境内
月性が開塾した私塾、萩の松下村塾に並ぶ草堂
- ・立志の碑：妙円寺境内
- ・柳井市立大島図書館：柳井市大島
月性コーナー、各種資料展示



月性展示館



月性画像

他の取組例

- 国語科 漢文の学習で、立志の詩をもとに七言律詩について学習する。
- 社会科 明治維新（幕藩体制の崩壊）の学習において、当時の社会状況や、歴史上の人物のつながりについて学習する。
- 保健体育科 武道の学習の一環として剣舞の型を学習する。

★ 地域の食材について考えよう

教材：岩国地域の食材

ねらい：岩国地域の食材を知ること、地域の食材についての理解を深め、地産地消のよさについて考えることができる。

〈学習指導要領：内容B（3）ウに対応〉

教材について

岩国地域では、「岩国れんこん」をはじめとして、「わさび」、「岩国赤大根」、「笹川錦帯白菜」など多くの食材が作られている。学校給食でも地産地消の取組が進み、生徒が食することも多い。授業では、これら地域の食材について知ると同時に、フードマイレージ（食料の輸送距離）についても学習をすることで、輸送距離の違いが環境に与える負荷についても考えさせる。また、学校給食センターの栄養教諭へのインタビュー映像を見せ、地産地消のよさについての理解を深めるとともに、地域の食材に興味・関心や誇りをもたせることができると考える。



展開例

学習の流れ

- ① 岩国地域でとれる食材を知る。
- ② 2種類のブロッコリー（地元産でやや高いもの／他地域産で安いもの）についてどちらを買うか考える。
- ③ 2種類のブロッコリーのフードマイレージを比較する。
- ④ フードマイレージの示す意味について話し合う。
- ⑤ 地産地消のよさについて話し合う。
- ⑥ 学校給食センターでの地産地消の取組について話し合う。

授業づくりのポイント

- ◇ スクリーンにヒントを映しながら、クイズ形式で食材を当てさせ、多くの食材が岩国で作られていることに気付かせる。
- ◇ どちらを選ぶか、理由とともに考えさせ、食材を選ぶ視点を明確に意識できるようにする。
- ◇ フードマイレージを実際に計算し、同じ食材でも環境に与える負荷が異なることに気付くことができるようにする。
- ◇ 個人で考えたあと、グループで話し合うことで、自他の意見の違いを明確にする。
- ◇ 学校給食センターの栄養教諭へのインタビューを見せ、身近な問題であることが実感できるようにする。

教材研究

- ・ 岩国地域の食材…「岩国れんこん」「わさび」「岩国赤大根」「笹川錦帯白菜」「岸根栗」「由宇とまと」「いちご」「はなっこりー」など
- ・ 「岩国地域の農業・農産品あれこれ」（岩国地域農業改良普及協議会）
- ・ 岩国市岩国学校給食センター
〒740-0032 岩国市尾津町5丁目11番2号 Tel：0827-34-1212
- ・ スーパーの地産地消コーナー

他の取組例

- 地域の食材を使った料理や郷土料理について、調べたり、調理実習をしたりする。
- 地域の人を講師として、地域の食材を使った料理や郷土料理について教えてもらう。
- 農家と提携し、農業体験をしたり、農作物の栽培についてインタビューをしたりする。

★ 地域の伝統・文化に学ぶ

教材：島田人形浄瑠璃芝居

ねらい：保存会の方々と交流し、人形遣い・太夫・三味線を体験することを通して、地域の伝統・文化についての愛着を自分の言葉で語れる生徒を育てる。

〈学習指導要領：各学校の定めたい目標による〉

教材について

島田人形浄瑠璃芝居は、山口県指定無形文化財で、起源は室町時代にさかのぼる。一体の人形を三人で操る（三人遣い）にその特徴がある。人形は江戸中期に作られた準国宝級を含め、八十余の頭（かしら）がそろそろ。

人形浄瑠璃芝居の存続と発展を願う保存会と、将来にわたって地域を愛する生徒を育てたい学校との双方にメリットがあり、コミュニティ・スクールの視点からも有意義な取組が期待できる。



展開例

学習の流れ

- ①ふれる
 - ・本物の人形に触れる。
 - ・鑑賞会で本物の人形浄瑠璃芝居を観る。
- ②つかむ
 - ・人形遣い・太夫・三味線に挑戦する。
 - ・自分の課題を設定し、調査する。
- ③ひろげる
 - ・芝居を全校集会や文化祭で上演する。
 - ・課題追究の成果を文化祭で紙面発表する。

授業づくりのポイント

- ◇保存会の方々の支援により、人形の動く仕組み、太夫独特の言い回し、太棹三味線の音色に興味をもたせる。
- ◇保存会の方々とともに、人形浄瑠璃に挑戦することを通して、伝統・文化にふれる意義を感じさせ、課題設定につなげる。
- ◇課題設定、情報の収集、整理・分析という学習を段階的に仕組み、浄瑠璃芝居の醍醐味を紙面にまとめ、表現させる。

活動の実際

- ①ふれる

まず、保存会からDVDによるガイダンスを受けた。次に、本物の人形で三人遣いを体験した後、実際の芝居を観て、自分の体験と比較し、伝統・文化の奥深さにふれた。
- ②つかむ

文化祭出演の選抜審査を保存会の方が行い、評価の言葉から指導者の伝統・文化への思いや活動の意義をつかんだ。
- ③ひろげる

実際の上演を通して、人形・三味線・太夫が三位一体となって展開する芝居の醍醐味を味わった。さらに、他の地方の人形浄瑠璃との比較や人形芝居の見所を調査、紙面発表し、生徒は地域の伝統・文化に愛着をもち、島田人形浄瑠璃に対する自分の体験を自分の言葉で生き生きと話せるようになった。



教材研究

人形の一部は光市民ホールに常設展示してある。また、保存会が作成したDVDから島田人形浄瑠璃の概要を知ることや、保存会から人形、舞台背景等を借りて上演することが可能である。

★ 学校のまわりの昔を調べよう！

教材：学校周辺の史跡（「塚の川古墳」^{つか こうこふん}「塩浜石炭焚滓堆積地」^{しおはませきたんたきかすたいせきち}など）

ねらい：学校のまわりに住んでいた昔の人たちの暮らしを伝えることで、地元で採れる粘土や石炭を有効に利用していた人たちの知恵を知ることができる。

〈学習指導要領：知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校 中学部社会科 内容（5）に対応〉

教材について

「塚の川古墳」



古墳時代末期につくられた古墳で、県内でも大型でモデル的な形をした円墳である。被葬者は、竜王山麓一帯で須恵器づくりに携わった人々を統率した支配者とされている。

「塩浜石炭焚滓堆積地」



学校に隣接する赤崎神社の境内にある石炭の焚きかすの山である。今から400年前の江戸時代に、百姓が副業としていた塩づくりのために石炭を使い、その焚きかすを積み上げたものである。

展開例

学習の流れ

- ① 学校周辺の海岸線や史跡の場所を確認する。
- ② 史跡にちなんだクイズに答える。
- ③ 実際に史跡まで歩き、前時のクイズの正解を知るとともに、外部講師からの解説を聴く。
- ④ 記録したことをまとめ、歴史新聞をつくる。

授業づくりのポイント

- ◇ 過去に散策した時の写真を見たり、周辺の地図（簡略化したもの）に色ぬりをしたりしながら、海岸線や史跡の位置や方向を確かめる。
- ◇ 例えば、「塩浜石炭焚滓堆積地」に関するクイズの場合、『石炭を焚いてつくったものは何か』の問いに対し、「木炭・塩・土器」の三者から一つ選ぶような形式で行う。
- ◇ 地元の郷土史に詳しい外部講師を招へいし、史跡の前でクイズの正解を伝え、解説を加えてもらう。その際に、石炭やその焚きかす等の実物を呈示する。その間、できるだけ生徒の手でレコーダーやカメラで録音・撮影を行う。
- ◇ レコーダー起こしで文字化したメモ用紙やプリントアウトした写真を、罫線付きの大判用紙に切り貼りしながらまとめていく。

教材研究

- 主に、山陽小野田観光協会による「山陽小野田観光検定ガイドブック」や郷土史に詳しい河本寅雄さんの著書「ふるさと散策—小野田編」を参考にする。
- 山陽小野田市は、昔から良質な粘土や石炭が採れる地域である。古代では県内で最古の須恵器窯跡の「松山窯」が見られるように須恵器がさかんに生産され、近世では「塩浜石炭焚滓堆積地」に見られるように化石燃料が活用され、近代では「小野田セメント」の会社設立によって国内産業の発展に寄与してきた地域である。

他の取組例

- 本教材の学習に関連づけて、市内の製陶所や火力発電所を訪れ、陶芸づくりを体験したり石炭集積所を見学したりして、現代における地下資源の利用の様子を理解する学習へ広げていくことができる。

★ ふるさとの海から学ぼう

教材：操船（3年生）・海洋生物（2年生）・水産加工（1年生）

ねらい：生徒と地域の人々、家庭、教師が温かい人間関係を築き、それぞれの願いや自由な発想を生かして、生徒たちに感動的で豊かな体験学習を展開することにより、豊かな人間性を育む。

〈学習指導要領：各学校で定めた目標による〉

教材について

- ・操船 船を繰る操作の説明。エンジン船の試乗
- ・海洋生物 水産大学校田名臨海実験実習場で、海洋生物（貝類、小動物、魚、海草など）を使った実験や実習を体験する。
- ・水産加工 魚をさばいて、魚ハンバーグをつかって試食する。



水産加工の場面

展開例

学習の流れ

水産加工（1年生）

- ①開講式 平生町漁業協同組合長さんのお話
- ②生徒代表挨拶
- ③活動 魚をさばく
機械ですり身にする
野菜を切り、材料に混ぜる
ハンバーグの形をつくり、揚げる
試食
- ④閉講式 組合長さんのお話 生徒代表挨拶

授業づくりのポイント

- ◇平生町の近海で獲れた魚のおろし方を学ぶことから活動を始め、野菜と魚のミックスハンバーグを作ることを通して、「地産地消」のメリットを実体験させる。
- ◇魚を調理するところから、ハンバーグの試食までの流れの中で、私たちが生きるということは、他の生物の「命をいただいている」ことを意識させ、給食を大切に食べるなど、食育にも関連させる。

教材研究

- ・平生中学校の総合的な学習における「ふるさと体験学習」は、1年生から3年生までの一連の流れの中で学習が深まっていくように設定されている。1年生では、魚の命をいただいているということを理解すると同時に、漁業についての理解も深める。2年生では、身近な海洋生物についての学習をすることで知識としての理解が深まるといえる。3年生では実際に操船をして海に出て漁業体験をすることで、平生町の主要な産業の一つである「漁業」に対する総合的な理解をすることができる。
- ・2年生のチャレンジワークでも、平生町漁業協同組合での職場体験を実施しており、ふるさと体験学習での内容を補完するようになっている。これらの地域に密着した学習の流れの中で、自分が平生町という地域の一員であるということをも学ぶことができることには大きな価値があると考えている。

他の取組例

海洋生物（2年生）

- ①講義（植物の進化・海草の葉緑素について）水産大学校の先生による講義
- ②実習（海草の葉緑素の分析）

2年生は、1年生の時に植物についての学習を進めており、植物の進化についても理解している。そのため、海の中で進化してきた植物の中で、緑色の色素を持っている植物が陸上に進出したために、陸上の植物には緑色のものが多いという講義内容には興味をもって取り組ませることができた（実習は二人一組で行い、相談しながら進めることができるように支援する）。赤い海草も緑の海草も、同じように葉緑素を含んでいることを視覚的に捉えることができた。